
大乱闘スマッシュブラザーズX 破壊の化身と希望の戦士たち

ピノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大乱闘スマッシュブラザーズX 破壊の化身と希望の戦士たち

【Nコード】

N2333Y

【作者名】

ピノ

【あらすじ】

スマブラ？のオリジナル小説です。

クレイジーハンドが狂いだします。

序章 くタブーの復活（前書き）

警告

ここではスマブラXのオリジナル小説を書いています^^
隠しキャラなどのネタバレがあるのでネタバレを好まない方は
注意してください。と言うより亜空の使者をクリアしていない、
あるいは知らない方が呼んでも分からないと思います…。
マニアックですいません…。

序章 くタブーの復活

ここは何も無い闇の空間…

ニヒルで暗く、ただ闇が広がる寂しい空間…

そこに今何かが現れようとしていた…

巨大な左手

「うぐあああああああああ！！」

巨大な右手

「うう… やつと我らの部屋へ戻ってこれたか…」

巨大な左手

「何とかなったようだな…」

突然その闇の空間にどこからとも無く巨大な白い右手と左手が現れた。

右手が創造の化身マスターハンド、左手が破壊の化身クレイジーハンドだ。（以後Mハンド、Cハンド）

そう、この闇の空間は彼らの部屋だったのだ。

Cハンド

「何も無いな・・・」

Mハンド

「タブーめ…我らの部屋を亜空間にし、世界征服をもくろむとはふざけた真似を…」

Cハンド

「ともかく復元しよう。さあ、やってくれ」

Mハンド

「ああ。」

そう言うとMハンドはパチリと指を鳴らした。

パアアアアアアア！！

すると辺りがまばゆく光り、彼らの部屋が復元された。
…とは言っても平らな台の様なものが現れただけだったが。

Cハンド

「見事だ。力は衰えていないようだな…」

Mハンド

「あの程度のことでは衰えるほど弱くは無い。我らは2体で1体だ。創造の化身である我が必要なものを作り、代わりに必要の無いものをそなた（クレイジーハンド）が破壊する…。どちらかが欠ければ世界のバランスが崩れてしまう。やはりあの程度のことではやられる訳にはいかないのだ。…勝てなかったのは事実だがな…」

Cハンド

「はっはっは、そうだな。ん？なんだこれは？」

クレイジーハンドは台の上に見覚えの無い青黒いエネルギーの玉を見つけた。

Mハンド

「タブーが残していった物のようだな。今度はお前の番だ。お前の力を見せてもらおう」

Cハンド
「うむ。」

そういうとクレイジーハンドはその玉を握りつぶした。…すると

???

「……………我を目覚めさせたのはお前か。」

どこからか声が聞えて来た。

だがその束の間、クレイジーハンドが突然黒いオーラに包まれた。

Cハンド

「ぐああああああ！！！！」

Mハンド

「な、なんだ？まさか・・・タブーか？」

マスターハンドは恐る恐る訊いた。以前の悪夢を思い出しながら…

Cハンド

「フフフ…そうだ。我の名はタブー。一度は世界征服を試みたが失敗に終わったのは言うまでも無い。

だが！この破壊神の体に乗っ取った我に敵などいない！！さあ第二

の世界征服の始まりだ！！覚悟しろ！！」

クレイジーハンドは狂っていた。タブーに憑かれ、心も体も乗っ取られ、タブーへの抵抗すら出来なくなったクレイジーハンドはマスターハンドへの敵意を表した発言をしている。

Mハンド

「くっ…。おのれ…。おのれえええええ！！」

マスターハンドは気合をこめてクレイジーハンドへ殴りかかった。
しかし・・・

Cハンド

「ふっ。無駄なことを。」

そう呟くとクレイジーハンドは黒いオーラをマスターハンドに絡ませた。

Mハンド

「何・・・！！？」

Mハンド

「うううう…　ぐはっ！！　何故だ？力が抜けていく…創造の化身

剣は見事にクリーンヒットし、マスターハンドに深い傷を負わせた。

Cハンド

「フッ、見事だ！！では次は…」

そう言うとクレイジーハンドは何か特殊な力をこめて剣を握りしめて破壊した。

ばきっ！！

Cハンド

「やはり見事だ。では行くでしょうか。グアッハッハッハ！！！」

マスターハンドはタブーに創造の力を持って行かれてしまい、気が付けばただの巨大な右手でしかなかった。

Mハンド

「待て．．．どこへ行くんだ！？」

Cハンド

「フン、今の貴様には関係の無いことだ。愚かなでくの坊はそこで

大人しく眠っている。せいぜい良い夢でも見るがいい。さらばだ！
」

そう言うときクレイジーハンドはどこにあるのやら闇の空間の出口からどこかへと出て行った…

Mハンド

「バカな…」

そしてマスターハンドはそのまま何も出来ずにぐったりと気を失ってしまった…

序章 くタブーの復活（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

これからも連載していきます。

つまらなかったらゴメンね

第1章　く平和な戦いからの異変く（前書き）

ここから本格的にこの小説が始まります。
お楽しみに　！！

第1章 平和な戦いからの異変

「さあ、始まるようですね」

「そうね、楽しみだわあ」

ここは空中に浮かぶスタジアム。

このスタジアムの観客席で2人の女性が楽しげにお喋りをしていた。

白いドレスの姫ゼルダとピンクのドレスの王女のピーチだ。

彼女らは今から始まる試合を心待ちにしていた。

ピーチ

「私はマリオに勝って欲しいわあ。何度もお世話になってるんだもの。」

ゼルダ

「あら、わたしが応援するリンクも負けてないわ。」

ピーチ

「どちらが優勝するか楽しみね」

そんな楽しいお喋りの途中ゼルダが突然顔をしかめて言った。

ゼルダ

「…もうあんなことは起こらないわよね？」

ピーチ

「あら、ゼルダったらそんなこと心配してるの？もう亜空軍は滅びたのよ？それにタブーとの戦いの後にあの大きな手の力ミサマが私たちみんなに最後の切り札の源のスマッシュボールをくれたのよ？あれがあればたとえお月様が攻めてきても大丈夫よ」

ピーチはやさしくゼルダを宥める。

ゼルダ

「そうね考えすぎだわ、楽しく行きましょ」

ピーチの言葉を聞いて安心したゼルダの顔に安堵の笑顔が戻りピーチも安心したようだ。

???

「なあなあ、だれが勝つか賭けでもやらないか？当たったら一気に大金持ちだぜ！？」

楽しくお喋りしている女性たちにとてつもなく下品な男が話しかけ始めた。ワリオだ。

ピーチ

「ちよつとなあに？あなたと一緒にいると私達まで下品に見えるからあっちに言っていてちょうだい。」

ワリオ

「なんだよ！！せつかく俺様が誘ってやってるのによ！！俺様も仲間に入れてくれよ！！」

ゼルダ

「でも今は私たちだけの時間を下さらない？私はピーチと一緒にゆつくりと試合を見たいから悪いけど後にしてね。」

ワリオ

「あゝ！！そうかそうか俺様は所詮のけ者だよ！！あっちに行つてればいいんだろ！？」

ピーチ

「もう分かったからあっちへ行つてよ。」

ピーチの言葉を聞いてワリオはふて腐れた様に2人から離れていった。…と見せかけて、

ワリオ

「俺様をのけ者した罰だ！！喰らえ！！」（ぷう～～～）

ワリオは相手にされなかったことに對して怒つて2人におならをかけた。そして「ざまあ見る！！」と吐き捨てて去つていった。

ピーチ

「きゃあ～～！！くっさあ～～い！！」

ゼルダ

「ケホッ、ケホッ、ひどい臭いですね」

2人がワリオに不満を漏らしているとスタジアムにアナウンスがかり始めた。

アナウンス

「レディースアンドジェントルマン！！今回も熱い戦いが幕を開けたぁー！！」

ピーチ

「ふう、やっと始まったようね。．．．．．なんかまだ臭い…」

アナウンス

「さあ、ではルールの確認です！！今回は8人制のトーナメントバトル！！組み合わせはこちら！！」

マリオ

-

デデデ

カービィ

-

リユカ

ヨッシー

-

ピット

ディディー

-

リンク

ピーチ

「マリオとリンクは…決勝で当たることになるわね」

ゼルダ

「そうね、お互いに勝ち進むといいわね。二人の決勝が楽しみね。」

そして第一試合の二人の選手が入場してきた。

マリオ

「ひゃっほうー!!」

デデデ

「やってやるぞい!!」

ピーチ

「あ、マリオだわ!!頑張ってっ!!」

ピーチはマリオの登場を心底喜んでいた。

アナウンス

「さあ!!お互い尋常に…。一回戦スタート!!」

試合が始まった。

ピーチ

「マリオー!頑張ってえ!!」

ピーチの応援に応えるようにマリオの猛攻が始まった。

マリオ

「行くぞ!!ファイアボール!!」

ボン、ボン、ボン、

デデデ

「あちゃ、あちゃ！！何するぞい！！」

マリオのファイアボールが炸裂し、デデデのガウンに燃え移った。

ゼルダ

「見事ですな〜」

デデデ

「おのれ〜。反撃ぞい！！喰らえワドルディぞい！！」

デデデは力強くワドルディを投げつけ、まわりを驚かせた。

ゼルダ

「でもやっぱりデデデさんも強そうね」

ピーチ

「マリオも苦戦するかしら？」

マリオ

「なんのー!!」

だがしかし、マリオはワドルディに向けてスーパーマントを翻し、デデデにワドルディをぶつけて見せた。

デデデ

「痛っ!! やってくれるぞい!!」

ピーチ

「流石マリオね! 見事だわ」

ピーチが感心するなかマリオに反撃をしようとデデデがハンマーを掲げた。

デデデ

「ここからワシの反撃ぞーい!!」

…だがそんな意気込みもむなくマリオの更なる連弾に飲み込まれる一方だった。

マリオ

「いくぞ！」

マリオは走って一気に接近したかと思うとスライディングを決めた。さらにそのままの勢いでメテオナックルを決め、そこからさらにヘッドバットをかました。

…だがまだ終わることなくスーパージャンプパンチへと流れるように決めていった。

「ぐうう、もうここまでかぞい…」と呟きながらふらつくデデデに対してピーチとあの男は大喜びだった。

ピーチ

「きゃ〜〜！！マリオってやっぱりすごいわね！！！」

ゼルダ

「これなら決勝まで進めそうですね〜。」

ピーチ

「あら？何行ってるの？マリオは優勝するのよ！」

ゼルダ

「でもリンクも負けてないわよ。」

2人がのんびり話していると、2人の会話を切り裂くようなあの男の声が地鳴りのように響いた。

ワリオ

「がっはっは！！金だ金だ！！マリオがスーパージャンプパンチを繰り出せばコインが飛んできて儲かるぞ！！行けー！！もう一発決めろー！！」

ピーチ

「なんなの？まだここにいたの？　お願いだからあっちに行つてよ。あなた邪魔なの」

ワリオ

「なんだなんだ？お前らもう一発お見舞いさせたいのかあ？」

ゼルダ

「いい加減にしないと怒りますよ？」

ワリオ

「へへーん！知るかあ！やっぱりもう一発喰らえ！！」（ブウウウウ）

またしてもワリオが2人におならをかけて去っていった。

ピーチ

「ケホッ！！もういい加減にしてよ！！ケホッ！ケホッ！臭っ！！」

ゼルダ

「こんな下品な人初めてです。ケホッ、ケホッ。」

ピーチ

「で、マリオは・・・、」

ピーチは試合に目を向けるとマリオがデデデにとどめを刺しているところだった。

マリオ

「とどめだ！！ファイア掌抵！！」

ポポーン！！

デデデ

「ぐわああ！」

アナウンス

「勝負あり！！ 勝者マリオー！！」

ピーチ

「やったー！！マリオが勝ったあ！！」

ピーチはマリオの勝利を心底喜んでいた。

マリオ

「ナイスファイト！」

デデデ

「ぬぬ〜！おまえなかなか強いぞい！！このワシを負かすとは大した者だぞい。」

そして選手たちはお互いに握手を交わしてスタジアムから去っていった。

ゼルダ
「勝ちましたね。」

ピーチ

「よかったわ。つぎもきつと勝ってくれるわ。」ピーチ

だがそんな2人の会話を切り裂く下品な声がまた響いた。言うまでも無くワリオだ。だが今回は何かが違う。ワリオが悲鳴を上げていた。

ワリオ

「ぐあああ!! 離せよ!! 離せって言ってるだろ!!」

ピーチ

「何なの? ワリオったらしつこいわね!!... あら?」

ゼルダ

「今、確かにワリオの声が...。でもない...。どうかしたのかしら?」

ピーチ

「離せとか言ってたわ。何かあったのかしら...? でもまあいいわ。ワリオったらあんなに酷いことしてくれたんだから、きつとバチが当たったのよ。ほおって起きましよう。」

ゼルダ

「そうね・・・きっとそうよね。」

ピーチたちもおかしいとは思ったが散々酷い事をしたワリオを気にかけることはなく、ワリオはほったらかされてしまった。

しかも皮肉なことにワリオの異変に気付いていたのはピーチ達だけだったため、ワリオはだれにも助けてもらえなかった。

そしてワリオは助けてもらえなかった。

たとえクレイジーハンド（タブー）にさらわれても…

第1章 く平和な戦いからの異変く（後書き）

もし何かおかしい所や

口調がいまいちなどの

訂正するところがあつたらどんどん行つてください。

第2章　～一人目の犠牲者～

ワリオ

「うっ……」

ワリオは限りなく広がる闇の空間の中にポツンとある台の上で目覚めた。

ワリオ

「あれ？あれれれれ？ここはどこだ！？俺様って何してたんだっけ！？」

ワリオはぼんやりと考え出した。ただでさえ働かない頭を懸命に働かせて。

ワリオ

「えーと……あ……つと？ああ！！思い出せねえ！！」

ワリオは思い出せないことに苛立ち地団駄を踏んだ。そのとき！

チャリン…………。

ワリオのポケットから一枚のコインが落ちて何も無い空間に寂しげにコインが落ちる音が響いた。

ワリオ

「コイン……。あー！ー！ー！思い出した！ー！このコインってスタジアムでマリオが技と同時に飛ばしたコインだ！ー！そうだ！俺様はスタジアムに居たんだ！ー！したらいきなりバカでかい手に掴まれたんだ！ー！で、その後に……！ー！……その後に？……ああ！ー！やっぱり思い出せねえ！ー！俺様ってどうなっちまったんだあ！ー！」

何度考えても思い出せないことに苛立つワリオの目にぐったりと倒れている大きな右手が写った。

ワリオ

「ん？んんん？？あれって俺様をこんな所まで連れてきた手だよな！ー！くそおー！ー！！」

わけが分からずに混乱したワリオはその巨大な右手へ突進した。

ワリオ

「おいこらあ！ー！俺様をこんな所に連れてきやがって！ー！起きろ！ー！……！」

しかしその右手はピクリとも動かなかった。ぐったりと倒れたまま。

ワリオ

「くそお！！俺様の攻撃でも起きないとは、まさか死んでいるのか？．．．ん？こいつ手の甲にでかい傷があるぞ！！．．．よし！！食らええ！！」

ワリオは右手にある傷に目掛けてパンチを繰り出した。すると動かなかった右手がピクリと動き出し、フラフラと言葉を発した。

Mハンド

「うう．．．．．．我はいつたい何をしていたんだ？うっ！！この傷は確か．．．。そうだ、タブーの仕業だったな。」

ワリオ

「おいおいおい！！お前！！俺様を元の世界へ戻しやがれ！！」

ワリオは起き上がった巨大な右手に文句を言いながらキックを繰り出した。
マスターハンド

するとマスターハンドはゆっくりと宙へ浮き上がり、ワリオの姿を確認した。

Mハンド

「なんと！！そなたはワリオではないか！なぜここにいるのだ？」

ワリオ

「あ？俺様のことを知ってるのか？まあ有名人だから無理もないな！！。…って俺様をこんな所に連れて来といて何言ってやがんだ！早くもとの世界へ戻しやがれ！」

マスターハンドはまだ頭（？）がはつきりしなかったがワリオの言葉を聞いて理解した。ワリオはきつと自分をクレイジーハンドだと勘違いしているのだと。

Mハンド

「ワリオよ。そなたをここへ連れて来たのは私ではない。そなたを連れて来たのはおそらく私の相手のクレイジーハンドだ。私はマスターハンドであってクレイジーハンドではない。実は今クレイジーハンドはタブーに憑かれて狂っている。そのためタブーの計画にそなたが巻き込まれたと思われるのだが…」

ワリオ

「よくわかんねえや。で、なんでお前は俺様の名を知ってんだよ？」

Mハンド

「逆に聞くが…。そなたはもう亜空軍の事件を忘れたのか？」

ワリオ

「亜空軍の事件だと？．．．ん！思い出したぞ！！そうだあの時に俺様をこき使いやがった手の化け物だな！！」

後で働かせた分キツチリ請求してやるからな！！もちろんすぐに払わなかった分の延滞料金も込みだからな！！で、とりあえず今は俺様を元の世界に戻してくれよ！相方ならそれぐらい朝飯前のウンチより簡単だよな？」

Mハンド

「朝飯前のウンチか…私にはそっちの方が難しいような気が…。おつと話がそれたか。しかしワリオよ。済まないが今の私にはそなたを元の世界に戻す力は持っていないのだ…。」

ワリオ

「あ？なんでだよ」

未だに状況が理解できないワリオにマスターハンドが分かりやすく説明した。

ワリオ

「ふゝん。やつばよく分かんねえや。でもとにかくお前は今のただの化け物で役立たずって訳だな。…ん？

てことは？…俺様が元の世界に戻る方法は無いつてことかゝゝ！？
おいおいおい！！どうしてくれんだよ！！俺様は戻りたいんだよ
――！！」

????

「戻らせてやるう。」

やっと状況が理解できたが、混乱して叫び散らすワリオの元にどこからか声が聞えた。マスターハンドに似た声だった…。

ワリオ&マスターハンド

「誰だ!？」

Cハンド

「フハハハハハ! 私だ。 そうだ、タブーだ。 それにしてもワリオよ、久しぶりだな。 元の世界に戻りたいようだな。 安心しろ。 パワーアップして戻してやるぞ。」

どこからともなくクレイジーハンドが現れたのだった。

ワリオ

「あ? お前が噂のクレイジーハンドか! ? おい! ! 俺様は戻ればそれでいいんだよ! ! パワーアップして戻ってどういうことだよ! ? また変なことするんじゃないだろうな! ? 」

Cハンド

「何を言うか、お前を常に切り札状態にしてやると言うことだ。 どうだ? ワリオマンなら金稼ぎにも好都合ではないか? . . . おつとそうだ! ! 私がこの役立たずの代わりにお前にコインを支払うでしょう。 さあどうだ? 今なら本来払う額の5倍払うことにするぞ? これでも乗らないと言うならお前はこの闇の中で一生を過ごすことになるだろうがな...。」

ワリオ

「へっ! ! ! 5倍だなんてやれるモンならやって見やがれ! ! ! 」

Cハンド

「そうか…ならば」(パチっ)

そういつとクレイジーハンドは徐に指を鳴らした。すると…、

ジャラジャラジャラジャラジャラア!!!!!!!!!!

突然ワリオの目の前にとてつもない量のコインが現れた！

ワリオ

「うおおおお！！金だ！！金だ！！お前やるじゃねえか！！やつば
こんだけの金があるんだから元の世界に戻らねえとな！！おい！！
左手！！何でもいいから戻しやがれっ」

金を見たワリオは一瞬で我を忘れて浮かれてタブーの持ちかけた怪
しい話に乗ってしまった。

Mハンド

「くっ…．．．我の力をこんなことに…。」

Cハンド

「そうか。行く気になったか。ならばまずお前をパワーアップさせることにしよう。」

クレイジーハンドはそう言つと金に浮かれているワリオを掴み上げ、そのまま握り締めた。

ワリオ

「痛て！おい、もっとやさしく包めよ！！俺様はデリケートなんだぞー！！」

Cハンド

「フンッ！！」

パアアアアアア！！！！

クレイジーハンドがワリオに力をこめると光とともに無数のスマッシュボールが現れた。

Mハンド

「ワリオ…。もうだめか…。」

マスターハンドの言葉もむなしくクレイジーハンドが手を離れたと

きにはワリオはワリオマンになっていた。しかも微量だが何か悪いオーラを帯びている。

ワリオ

「うう。俺様は本当にパワーアップしたみたいだな！！じゃあ早く元の世界に戻してもらおうか！」

ワリオは奇抜な格好でタブーに再交渉をした。しかし…、

Cハンド

「黙れ。」

ビシャアアアアア！！

そう言うところクレイジーハンドはワリオに暗黒の稲妻を落とした。

ワリオ

「ぐふっ！」

するとワリオの体から悪いオーラが更に大量に溢れ出した。

ワリオ

「…ぐああああ！！！」

Cハンド

「成功したぞ！！さあワリオよ！！もう私の計画はお前の頭に叩き込まれたはずだ！！行け！！ワリオマン！！」

タブーがそう言うのとワリオは何も言わずにこの闇の中から出て行ってしまった。

Mハンド

「タブーめ……。」

Cハンド

「どうかしたか、でくの坊。悪いが我も暇ではない。また行くところがある。お前はここで留守番だ。」

Mハンド

「くそっ……。。」

そう言うときクレイジーハンドはまたどこかへ行ってしまった。

Mハンド

「ん？なんだこれは？」

マスターハンドはタブーが何か綺麗な玉を落としていったのを見た。

しかしこれは一体何なのか…

第3章 く現れない戦士たち

ワリオマン

「がっはっは！！金があれば何でも出来るぜ！！」

タブーに洗脳されたワリオはタブーの計画にのっとり、空中スタジアムに戻っていた。

ワリオマン

「さうで、適当にさらって来ればいいんだよな。」

ワリオはタブーに暗黒の稲妻で洗脳された時に亜空軍事件にかかった戦士たちを適当にさらって来るように頭にインプットされたらしい。

ワリオマン

「じゃあ、ここらで適当に探すとするか！」

ワリオマンはマントを使ってスタジアムの中央へ飛んでいった。

その頃観客席ではピーチとゼルダが第二試合が始まるのを心待ちにしていた。

ピーチ

「次の試合はカービィ対リユカね。」

ゼルダ

「カービィにはあの時お世話になったわね。」

？

「うむ、確かにそろそろだな。」

2人の姫の横で一人の男がスタジアムを眺めながらつぶやいていた。その声はワリオとは違い、實のある渋い声だった。

ピーチ

「あら、メタナイトさん。お久しぶりですね。あなたも観戦ですか？」

メタナイト

「然様。カービィを見たくてな。カービィの戦い方は参考になるかな。」

そう、彼はメタナイトだった。クールで女性陣に人気らしい。

ゼルダ

「もし良かったら一緒に見ましょう。」

メタナイト

「かたじけない」

メタナイトはゼルダに誘われ一緒に試合を見ることにした。

そして、そうこうしていると試合の開始を知らせるアナウンスが流れ始めた。

アナウンス

「さあ！！ただいまより第二試合の始まります！！両選手入場！！」

まずはリュカが入場してきた。

リュカ

「僕はこの戦いを通してもっと強くなるんだ・・・」

リュカは弱々しい自分を変えたいと思い参戦したようだ。

アナウンス

「続いてカービー選手の入場です!!」

ピーチ

「はじまつたわね」

．．．．．
しかしカービィは出てこなかった。いくら待っても。

アナウンス

「カービィが出てこない．．．。ここは仕方ありませんがリュカを不戦勝といたします。ご理解ご協力のほどお願いいたします。」

アナウンスを聞いて会場がざわつき始めた。

メタナイト

「何故だ？何故出てこない？」

ゼルダ

「本当にどうしたのかしら．．．？」

メタナイトやゼルダが本気で心配するなか、能天気な者もいた。

ピーチ

「でもカービィのことだから試合なんて忘れて食べ物を追いかけて
いるなんてことは？」

メタナイト

「う．．．うむ。確かにカービィなら有り得ない事ではないが．．．」

気付けばざわついていた会場もピーチと同じ考えでまとまっていた。

アナウンス

「では．．．。少しアクシデントがありました。第三試合を開始い
たします。」

ゼルダ

「まあ、今回は残念ですが、ここからは純粹に観戦を楽しみましょう。
う。」

メタナイト

「うむ。そうするでしょう。」

そして何事も無かったかのように第三試合が始まった。第三試合は

ピット対ヨッシーだ。

アナウンス

「さあ選手の入場です!!」

まずはピットが入場してきた。

ピット

「いくぞ!!勝負だ!!」

アナウンス

「さあ、続いてはヨッシー選手の入場です!!」

メタナイト

「やっと始まるな。」

.....
しかしヨッシーも出てこなかった。いくら待っても……。

アナウンス

「おっと。ヨッシーも出てこない……。ここは仕方ないですがピットを本日二度目の不戦勝といたします。」

またしても会場がざわつき始めた。

メタナイト

「ヨッシーまでもか!？」

ゼルダ

「本当に何があったのかしら・・・?」

ピーチ

「まあまあ、きっとカービィと一緒に食べ物を探し求めているのよ。ヨッシーならよくあるわ。」

気付けば会場のざわつきは、またしても腹ペコ説で丸く治まっていた。

メタナイト

「うむ・・・。悪いことが起こらなければ良いが・・・。」

ゼルダ

「まあ今はこの説を信じましょう。さあ!次はリンクの出番よ!」

メタナイト

「リンクか。彼の剣の扱いも楽しみだな。」

アナウンス

「さあアクシデント続きでしたが第四回戦を開始いたします!!」

そしてまた何事も無かったように試合が始まった。

アナウンス

「まずはディディーコングの入場です!!」

ディディー

「ウキーー!!おいらの力を見せてやるぞー!!」

ディディーは格好つけたように転がりながら登場した。

アナウンス

「さあ続いてリンクの入場です!!」

ゼルダ

「ついに来たわ!!」

ンクは現れなかった。カービィやヨッシー同様に……。しかし

ゼルダ

「リンクまで…。どういふことなの…。？」

メタナイト

「さすがにおかしいぞ…。。」

ピーチ

「まあ落ち着いて。きっとリンクも食べ物求めて……………」

ゼルダ

「リンクはそんなに食いしん坊じゃないわよ！！」

ピーチ

「そ…、そうだったわね…。。」

今回は腹ペコ説が通用するわけも無く会場はざわめいていた。

ゼルダ

「何が原因なのかしら…？」

メタナイト

「控え室が怪しいな…。行ってくる。」

ゼルダ&ピーチ

「あ、待って！！私も行くわ！」

メタナイト

「そうか……。ならば危険は承知してくれ。……………と言つまでも無い
か。」

そう言うとピーチはパラソルで、ゼルダはフロルの風で、メタナイトは滑空しながらスタジアムの中央へ飛び、選手たちの出入り口から控え室へ向かっていった。

ピーチ

「ここが控え室のようね…。」

彼らの進んだ先には三つの控え室があった。

1つは控え室A。 マリオ、リュカ、ピット、ディディーの控え室だ。

もう1つは控え室B。 カービィ、ヨッシー、リンクの控え室だ。

そして残りの1つはVIPルームだ。 デデデ専用の豪華な控え室だ。

メタナイト

「うぬ。 見るからに控え室Bが怪しいな。 入るぞ!!」

ゼルダ

「ええ。 行きましょう」

(ガチャッ)

メタナイトが控え室の戸を開けた。 すると…。

????

「ガッハツハ！！3人もさらえば追加ボーナスでガッポガッポだぜ！！」

寶のない男がカービィとヨッシーとリンクのフィギュアを抱えて控え室の片隅にあるブラックホールの様な所へ入ろうとしていた。

メタナイト

「待て！！何者だ！？」

メタナイトは愛剣である宝剣ギャラクシアを構えながら気をこめて叫んだ。

ワリオ

「あ？俺だよ！ワリオだよ！！」

その寶のない男はワリオだった。

メタナイト

「ワリオ…。何をする気だ！！またタブーの仕業か？」

ワリオ

「金のために働いているだけだ！ タブーなんて知ったこっちゃねえー！！ とりあえずこいつらを何だかって言うでかい左手に渡せば儲かるんだぜー！！」

ワリオマンと化したワリオは怖いものなんてなかった。

ゼルダ

「ワリオ・・・。よく分からないけどリンクやカービィを返して！！」

ピーチ

「そうよー！！返しなさいよー！！」

そのときワリオはニヤリと不敵に笑いを浮かべた。

ワリオ

（フッフッフー！！これは良いことを思いついたぞー！！）

ワリオ

「へっ！！返すもんかよー！！おい！それよりお前らもフィギュアになりやがれー！！こうすれば俺様はもつと儲かるぜー！！」

メタナイト

「なんだと!？」

ワリオ

「行くぜえええ!!」

そう言うワリオはどこからかダークキャノンを取り出した。

ワリオ

「発射あ!!」(ズキュウウン!!)

ダークキャノンから黒い矢が飛び出し、メタナイト目がけて飛んでいった!

メタナイト

「甘いな。」(バサリ)

しかしメタナイトはデイモンションマントでキャノンの矢をひらりとかわした。そしてその矢は後ろにいるゼルダへ飛んでいった。

ワリオ

「くそ!!かわされちまったかあ!! んん?でも後ろにゼルダがいるぞお!! 行けえ!!そのままゼルダに当たれええ!!」

ワリオは一度は地団太を踏んだが、ゼルダに当たるといっ期待に胸を膨らませていた。

ゼルダ

「ふん、そんなもの大した事ないわ」（キラン！）

しかしゼルダはネールの愛でキャノンの矢を跳ね返した。

ワリオ

「くそお~~~~！！ひらひらと避けやがって~~~~！！」

ワリオはまたも地団太を踏んだ。　　∴しかしそのときだった！！

ワリオ&メタナイト

なんとゼルダが跳ね返した矢はゼルダの前にいたメタナイトに刺さってしまった。そしてメタナイトはフィギュアになってしまった。

ピーチ

「きゃ！！メタナイトが！！」

ゼルダ

「私ったらなんてことを…」

ワリオ

「へへーん！！これは儲けたぜ！！さあお前らも大人しくフィギュアになりやがれ！！」

ワリオはメタナイトのフィギュアを拾い上げたかと思うとまたダークキャノンを2人に向けた。

ワリオ

「さうで、また跳ね返されちゃ面倒だな。跳ね返せないようにパワーMAXで行くぜ！！」

ダークキャノンに力が溜まっていく。そしてパワーがマックスになった。

ゼルダ

「もう、ここまでかしら…。」

ピーチ

「誰か…。」

ワリオ

「終わりだあ…！」

そして…！

ブシューウウウ…！

しかし！

ワリオ

「うわ！！なんだ！？」

なぜかワリオが戸惑いの声を上げていた。あれだけ有利な状況にいたワリオが戸惑っていた。

そのとき誰かの声が聞えた。その声の主はワリオでもピーチでもゼルドでもない、この場に居ない者の声だった……。

？？？

「危なかったな。」

？？？

「間一髪だったぞい。」

ピーチ

「この声…。まさかマリオ…!？」

ゼルダ

「デデデさんの声もしたような…?」

まさにそうだった。声の主は紛れもなくマリオとデデデだった。しかしなぜ彼らがここにいいのか、姫達はもちろん理解できなかった。

マリオ

「危なかった。ピーチ姫、お怪我はありませんか？」

ピーチ

「ええ一応無事よ。しかしマリオ、何故ここに？」

ゼルダ

「デデデさんまで何故ですか？」

デデデ

「なにやら隣の控え室が騒がしいと思ってマリオと見に来たらワリオが2人を攻撃しようとしてたぞい。」

マリオ

「だからとつさにポンプでワリオを妨害したって訳なんだ。」

ピーチ

「そういうわけだったのね」

ゼルダ

「なんとお礼を言ったらいいのか・・・。」

4人はそれぞれの状況を理解しあった。しかしそんな中一人苛立っている男がいた。その男は獲物をライバルに奪われてとても苛立っていた。

ワリオ

「おい！！コラあ！！何してくれてんだあ！！俺様のチャンスをどうしてくれるんだあ！！こうなったらお前ら全員フィギュアにしてくれるわ！！」

マリオ

「なんだって！？」

ワリオはそう言うたダークキャノンに手をかけた。

ワリオ

「行くぜえ！！まずはパワーチャージだ！！」

そしてワリオはダークキャノンのチャージボタンを押した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2333y/>

大乱闘スマッシュブラザーズX 破壊の化身と希望の戦士たち

2011年11月20日16時06分発行